

上の(1a)は他動詞文であるから、その主語 *svil-ma* が能格であるのは当然のことである。また(1c)は自動詞文であるから、その主語 *svil-i* が絶対格であるのも当然のことである。問題は、(1b)が自動詞文でありながら、その主語 *svil-ma* が能格であるという点にある。同じ自動詞文でありながら、(1b)の主語が能格、(1c)の主語が絶対格であるのはなぜなのか。というより、自動詞文主語はどういう場合に能格として表され、どういう場合に絶対格として表されるのであろうか。ちなみにクリモフ Klimov (1977: 33)は、能格主語をとる「意味上の自動詞」の数は「数百にも達するものであり、さらに接辞付加の派生動詞まで含めれば、おそらく数千に達しよう」と述べている。

グルジア語の自動詞文主語における能格と絶対格の使い分けは単純である。行為を表す自動詞をアオリスト形で用いる場合にのみ能格主語が現れ、その他の場合には絶対格主語が現れる。つまり、グルジア語ではそもそも過去の出来事を叙述するためのアオリスト時制においてのみ能格構文をとるのであるが、アオリスト形の自動詞を含む文において能格主語を用いるか絶対格主語を用いるかは、その自動詞が行為を表すか状態を表すかによって決定される。そこでたとえば、「Aがやった」という文のAは能格で表され、「Aがいた」という文のAは絶対格で表されるのである。

行為を表すか状態を表すかが能格構文を用いるか絶対格構文を用いるかの分かれ目となるのは、グルジア語を含むカルトベリ諸語全体にあてはまることなのである。またそれは、カルトベリ諸語ほど顕著ではないにしろ、同じコーカサスのナフ・ダケスタン諸語やアブハジア・アディゲ諸語にもあてはまることなのである。クリモフ(1983: 97-98)は、たとえばレズギ語(ナフ・ダケスタン諸語の一つ)において、多数の行為動詞が *ада хкадарна*「彼は跳んだ」、*ада зверна*「彼は走った」、*ада чукурна*「彼は疾走した」のように能格主語をとるといふ。同様にカバルディン語(アブハジア・アディゲ諸語の一つ)でも、*хитхъэлыхъым*「沈む」、*къэжыхъым*「走る」、*къзкIухъын*「歩く」などの自動詞は能格主語をとるといふ。さらにクリモフ(1977: 60)は、バツピー語(ナフ・ダケスタン諸語の一つ)では「行為遂行の能動性」を強調する場合に自動詞文主語が能格で表され、状態ないしは不随意的行為を表す場合にはそれが絶対格で表されるとして、次の例をあげている。

(2) a . *ас* *коттлас*

私 - 能格 心配する

「私は心配する」

b . *со* *коттол*

私 - 絶対格 心配だ

「私は心配だ」

- (3) a . атхо наздрах кхитра
 私たち - 能格 ぶつけた 地面
 「私たちは地面に身体をぶつけた」
- b . тхо казрах кхитра
 私たち - 絶対格 ぶつかった 地面
 「私たちは地面にぶつかった」

このように、ある種の自動詞文の主語が能格をとるのはなぜだろうか。この用法は、能格言語の体系から生まれた革新と見なすべきなのか、それとも別の言語体系の中で生まれた用法が能格言語の中に生き延びていると見なすべきなのか。この点に関して、クリモフらの考えは明確である。能格の自動詞文主語は、コーカサスの諸言語がかつて活格言語であった時代の残滓であると考えられるのである。これは、旧ソビエト・ロシアにおける内容類型学の伝統をひく研究者たちの一致した意見である。クリモフ(1983)は、言語類型が活格言語から能格言語へ、能格言語から主格言語へと移行するという前提に基づいて、コーカサスの諸言語が占めている歴史的座標を次のように説明している。

たとえばコーカサス言語圏では、アブハジア・アディゲ諸語は能格性の規準に近いにもかかわらず個別的には活格構造の特徴を顕し、ナフ・ダケスタン諸語は明らかに能格構造が支配的であるにもかかわらず主格化傾向を見せるのに対して、カルトベリ諸語は基本的には主格言語でありながら活格構造の残滓的な現象を保存するという認定を与えなければならない。(119 - 120頁)

このようにコーカサスのアブハジア・アディゲ諸語、ナフ・ダケスタン諸語、カルトベリ諸語が活格言語的な性質を帯びているという考えに筆者は賛成である。しかし、その性質をこれらの諸言語がかつて活格言語であったことに帰することには反対である。コーカサスの諸言語に観察される活格言語的性格は、革新であって残滓ではない。そもそも言語類型は、能格型から活格型に移行する。この考えはもちろん、過去の言語類型学が築きあげてきたもの、いわば定説として受け入れられている考えとは根本的に違っている。それにしても、活格言語とは一体どういう言語なのか。これを説明することから始めて、筆者の考える言語類型の変遷過程を述べることにしよう。

2 . 能格言語から活格言語へ

活格言語といいうるものは、北アメリカに非常に多く存在している。ナ・デネ語族に属するトリングット語やナバホ語など、スー語族に属するダコタ語やアイオア語など、マスコギ語族に属するマスコギ語やヒチティ語など、イロクォイ・カッド語族に属する

フロン語やモホーク語など、北米インディアン語の多くが活格言語である。

活格言語は南アメリカにも確認されている。ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン、ボリビア、ペルーの諸地域にまたがって分布するトゥピ・ワラニー語族には約50にのぼる言語が含まれるが、これらはすべて活格言語のようである。

以上のような言語が活格言語であるとして、その文法構造の特徴は何であるのか。これを示すため、まず最初にダコタ語（スー語族の一つ）の例文をあげてみよう。

- (3) a . wa-t'i
私 - 住む
「私は住む」
b . ma-sica
私 - 悪い
「私は悪い」
c . ma-ya-k'te
私 - あなた - 殺す
「あなたは私を殺す」

上の三つの文における wa と ma は動詞に付された代名詞的小辞であり、ともに「私」を意味する。これらは次のように使い分けられる。すなわち、活動・行為・運動を表す動詞を用いた文の主語となる場合、「私」は(3 a)のように wa- として表される。この場合、問題の文が自動詞文であるか他動詞文であるかは一切関与しない。一方、「私」が(3 b)のように状態動詞を用いた文の主語になる場合、および(3 c)のように他動詞の目的語となる場合、それは ma- として表される。

次に、カマユラ語（トゥピ・ワラニー語の一つ）の例をあげ、ここでも動詞に付される人称接辞が動詞の種類によって二分されることを確認しておこう。

- (4) a . wəra wararawijawa o-u?ú
鳥 犬 咬んだ
「鳥が犬を咬んだ」
b . wəra o-wewe
鳥 飛ぶ
「鳥は飛ぶ」
c . wəra i-po-wi
鳥 重い
「鳥は重い」

上の(4a)と(4b)では動詞が活性的意味(活動・行為・運動)を表すので、活性系列の3人称接辞 o- が動詞に付されている。一方、(4c)では動詞が不活性的意味(不活動・状態・静止)を表すので、不活性系列の3人称接辞 i- が動詞に付される。このような動詞人称指標の使い分けに基づいて、クリモフ(1977; 1983)は活性系列の接辞を含む文を活格構文、不活性系列の接辞を含む文を不活格構文と呼んでいる。もっとも、クリモフのいう活格構文と不活格構文のモデルには以下に示す三種の種類がある。

< 活格構文 >	< 不活格構文 >
1) N - Vact	N - Vstat
2) Nact - Vact	Ninact - Vstat
3) Nact - V	Ninact - V

これらのうち1)は、活性と不活性の区別を動詞の人称接辞のみに頼っている動詞型である。また、2)はその区別を動詞の人称接辞と名詞の格語尾の両方に頼っている混合型であり、3)は同じ区別を名詞の格語尾にだけ頼っている名詞型である。

これら動詞型、混合型、名詞型のうち、現存する活格言語に典型的な型は動詞型である。クリモフ(1983)は、「一貫した活格構造の代表言語にとっては、格パラダイムの欠如が特徴的である」(116頁)という。また、活格と不活格の対立は「機能的に類似した、二系列の動詞人称指標の対立の弱化に対するある種の代償措置であることに注意しておかなければならない」(94頁)という。つまりクリモフは、活格言語における活性と不活性は動詞人称接辞によって区別するのが本来的であり、名詞の格語尾による区別は弱化した動詞人称接辞を補うために生まれた二次的なものであると考えるのである。

筆者はしかし、活格言語における動詞人称接辞が一次的なものであり、名詞の格語尾が二次的なものであるという考えに賛成できない。というのは、名詞パラダイムとしての活格的形態も動詞人称接辞としての活格的形態も、その起源は同じ具格的要素を含む構文に求められるからである。そして両者は、似てはいるが、それぞれ独自の過程を経て発達したと考えられるからである。このことを以下で論じることにしよう。

まず、名詞パラダイムを有する言語において活格が生まれた過程を、筆者は次のように考える。

- 1) 具格副詞 + 絶対格主語 + 動詞
- 2) 能格主語 + 絶対格目的語 + 動詞
- 3) 活格主語 + 不活格目的語 + 動詞

1) から 2) への変化、すなわち具格副詞の能格主語化は、すでに先の稿で論じたことである。ここで問題としなければならないのは、2) から 3) への変化、すなわち能格主語の活格主語化である。

2) の能格構文は、一般に、制御可能な行為、すなわち随意的の行為を表した。したがって、能格主語は一般に随意的の行為の主体を表す。そこで能格は、ある種の能格言語において、随意的の行為を表す自動詞文の主語としても用いられるようになった。つまり、随意的の行為を表す他動詞文が能格主語をとるならば、同じ随意的の行為を表す自動詞文の主語も能格にしようとする類推が働いたのである。

次に能格は、ある種の言語において、随意的ではない行為、すなわち不随意的な行為を表す自動詞文の主語としても用いられるようになった。つまり能格の使用が、行為を表す動詞、すなわち活性動詞といいうる動詞を用いた文全体に拡張した。こうして能格は、もはやかつての能格ではなく、活格というべき格に変質したのである。この変化の過程を自動詞文の変化についてのみ図示すれば、次のようになる。

1) 能格言語の段階：絶対格主語 + 動詞

2) 中間言語の段階：能格主語 + 動詞 (随意的行為)

絶対格主語 + 動詞 (不随意的行為 / 状態)

3) 活格言語の段階：活格主語 + 動詞 (行為)

絶対格主語 + 動詞 (状態)

このように、能格言語から活格言語に至る間には中間言語の段階が存在する。中間言語における自動詞文では、能格は随意的の行為を表す場合にだけ用いられ、不随意的の行為を表す場合には絶対格が用いられる。ここで強調しておきたいのは、中間言語が単に架空の想定ではないということである。現存するいくつかの言語が、実際、この段階に到達し、この段階にとどまっている。たとえば上で言及したレズギ語は、ほぼ確実に中間言語として位置づけることが可能である。推察するに、コーカサスの諸言語の多くが中間段階、あるいは中間段階あたりに位置している。もっともグルジア語を含むカルトベリ諸語は、アオリスト形を用いた構文に限っていえば、すでに活格言語の段階に入っている。コーカサスの諸言語に観察される活格的性格は、残滓ではなく革新である。

さて、北アメリカと南アメリカにおける活格言語はどのようにして生まれたのであろうか。活性構文と不活性構文を動詞の人称接辞によって区別する言語の場合、それを名詞パラダイムによって区別する言語の場合と比べて、その歴史を遡ることが一層困難である。しかし、それを仮定すること自体は可能である。筆者の推定では、南北アメリカ

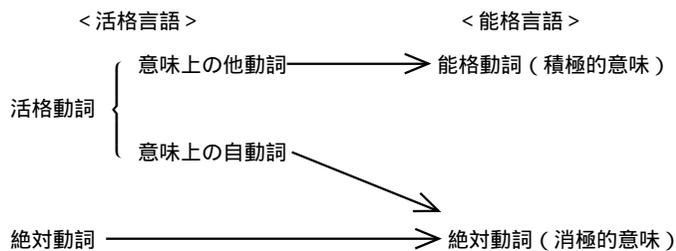
な成り行きであった。というのも、一つには随意的行為と不随意的行為は一般に同じ動詞形によって表されるからである。また一つには、ある行為が随意的行為か不随意的行為かをしばしば判別できないからである。こうして、たとえば「太郎がわざと転がった」場合でも、「太郎がうっかり転がった」場合でも、A型接辞が用いられるようになり、5)の体系が生まれた。5)はいうまでもなく典型的な活格型の体系である。

以上のように、活格言語は能格言語を経由して生まれたものである。名詞パラダイムとしての活格は具格副詞に由来する能格が拡大したものである。また動詞の活格的人称接辞も、具格的要素から転じた他動詞文主語と呼応関係にあった能格的人称接辞が拡大したものである。一方、活格と対立する不活格は自動詞文主語を標示した形態の系統をひく絶対格の「生き残り」であり、活格的人称接辞と対立する不活格的人称接辞も自動詞文主語と呼応した人称接辞の系統をひく絶対格的人称接辞の「生き残り」である。

上で述べたことは、しかし、筆者の考える活格言語の起源である。先にも述べたように、活格言語は能格言語に先行する言語であると一般に信じられている。山口(1995)も、活格言語から能格言語への変化を前提にして次のように語っている。

能格言語のばあいには、主体以外のものに働きかける積極的なものであるかどうかという観点から、主述関係がつくられる。したがって動詞はこの意味での積極的なもの(能格動詞)と、消極的なもの(絶対動詞)とに分けられる。活格言語の活格動詞のうちの意味上の他動詞の大部分といくつかの意味上の自動詞が、能格動詞に受け継がれたのである。残りの動詞と活格言語の絶対動詞はともに能格言語の絶対動詞に属することになった。(119頁)

ここで述べられている活格動詞、能格動詞、絶対動詞の関係は、以下のように図示することができる。



さて、活格言語における動詞区分と能格言語における動詞区分に上のような連続性が認められるとするならば、活格、不活格、能格、絶対格との間にどのような史的連続性があるというのか。また、活格言語における二系列の人称接辞と能格言語における二系列の人称接辞との間にどのような史的連続性があるというのか。従来の研究では、この点に関する考察が決定的に欠けていたように思われる。

言語類型が変わるとき、名詞のパラダイムであれ動詞の人称接辞であれ、それは漸次的な変化を遂げるはずである。したがって、ある言語類型が別の言語類型に転じたことを論証するには、そこに何らかの史的連続性が確認されなければならない。能格言語から活格言語への変化を想定した場合には、すでに述べたように、名詞のパラダイムと動詞の人称接辞の変化を連続的に捉えることができる。ところが、活格言語から能格言語への変化を想定した場合には、それが困難である。そのような想定に立った場合、活格言語において行為を表した自動詞文、すなわちクリモフや山口の用語を使っていえば、活格動詞のうちの「意味上の自動詞」は活格構文あるいは活性構文を廃して不活格構文あるいは不活性構文をとるようになっていったと仮定せざるをえないが、何ゆえにこのような変化が起こったかを首尾よく説明できない。ちなみに、自動詞文主語は後の時代の主格言語において主格語尾を獲得するのであるが、活格言語の段階で活格語尾を獲得した自動詞文主語が能格言語の段階でそれを喪失したという仮定は、自動詞文主語に付される格語尾がある段階で増え、次の段階で減り、さらに次の段階で増えたという仮定を導こう。このような方向性を欠いた変化が実際に起こったのであろうか。起こったとするならば、それを惹起した要因を明らかにすべきである。

3. 活格の発達順序

能格は、まず、過去の事象についての叙述に現れた。次に、能格は現在の事象についての叙述に用いられるようになった。また能格は、無生名詞にはじめて現れ、続いて動物名詞、人間名詞、親族・固有名詞に及び、さらに3人称代名詞、2人称代名詞、1人称代名詞へと拡大していった。しかしもちろん、能格言語の中には、名詞にだけ能格があって代名詞にはそれが認められない言語が多く存在する。また、名詞と3人称代名詞に能格があって1・2人称代名詞にはそれが認められない言語、あるいは名詞と2・3人称代名詞に能格があって1人称代名詞にそれが認められない言語も存在する。これらのことは、すでに近藤(1998;1999)において論じたことであるので、ここでは問題にしない。ここで問題とするのは、活格の発達順序である。活格も、能格の場合と同様に、過去の出来事を語る文において、また無生名詞において、その使用が始まったのであろうか。

この問題を解く手掛かりは、能格言語から活格言語への移行段階にある言語、あるいは能格言語の枠を一步はみ出した言語から得られそうである。そのような言語において能格の自動詞文への拡張が仮に過去の事象についての叙述にのみ観察されるならば、能格の活格化は過去についての叙述に始まり、それが現在あるいは未来についての叙述に広がったと考えられる。同様に、能格の自動詞文への拡張が仮に無生名詞を主語とする文にのみ見られるならば、活格は無生名詞から始まったのであり、逆にそれが1人称の

叙述、あるいは1・2人称の叙述においてのみ見られるならば、活格は能格の場合とは反対に1人称代名詞から始まったといえるであろう。

まず、能格言語における活格的現象と時制または相との関係を調べるために、マヤ語族に目を向けてみよう。八杉(1992)によれば、マヤ語族では主述関係がA型とB型と呼ばれる人称接辞によって表される。これらの接辞は、他動詞文主語(=他主)、自動詞文主語(=自主)、他動詞目的語(=他目)と次のように呼応するので、A型を能格型、B型を絶対格型と呼ぶことがあるという。

他主 A型/自主 B型/他目 B型

これは明らかに能格言語類型の接辞体系である。しかし、マヤ語族が首尾一貫してこのような体系を有するわけではない。たとえば、低地マヤ語では相の違いによって人称接辞の用法が異なるという。すなわち以下に示すように、完全相(=完了相)の自動詞文主語はB型接辞をとるけれども、不完全相(=不完了相)のそれはA型接辞をとるのである。

<完全相>	<不完全相>
他主 A型	他主 A型
自主 B型	自主 A型
他目 B型	他目 B型

低地マヤ語におけるこの体系は、半ば能格言語類型を示し、半ば主格言語類型を示している。すなわち、行為が完了していることを表す完全相では能格言語の接辞体系が保たれているけれども、行為が完了していないことを表す不完全相では主格言語の体系となっている。この主格言語の接辞体系は、明らかに革新である。つまりそれは、不完全相の動詞形を用いた自動詞文においてB型接辞がA型接辞にとって代わられることによって生じた新しい体系である。このように低地マヤ語が不完全相において能格言語類型を喪失したということは、一般に能格言語の崩壊が、完了していない行為、あるいは現在・未来の行為を叙述する文に始まり、それが完了した行為あるいは過去の出来事を叙述する文に及んだことを示唆している。

上の推論が正しければ、能格の活格化、および能格的人称接辞の活格的なものへの変化は、相・時制に関しては、能格と能格的人称接辞が生成されたのとは逆向きに進行したことになる。であれば、活格と活格的人称接辞は、名詞・代名詞の種類に関しても能格と能格的人称接辞が生成されたのと同様に、1人称代名詞に始まり、次に2人称代名詞、3人称代名詞に及び、さらに親族・固有名詞、人間名詞、動物名詞、無生名詞へと拡大していったのだろうか。

この疑問に答えるには、マヤ語族のモトシントレック語に注目する必要がある。八杉(1992)によれば、モトシントレック語は能格言語であるが、その自動詞は主語の人称に応じてA型接辞をとったりB型接辞をとったりする。すなわち下に例示するように、自動詞文主語が1・2人称代名詞の場合にはA型接辞が、それ以外の場合にはB型接辞が用いられる。

(5) a . i:-ma:q-i

A型1単(主語) - 上る - 接尾辞

「私は上った」

b . ma:q-i-

上る - 接尾辞 - B型3単(主語)

「彼は上った」

このように、モトシントレック語の自動詞文において主語が1・2人称代名詞のときには能格型のA型接辞が用いられ、主語が3人称の名詞・代名詞のときには絶対格型のB型接辞が用いられるという事実は、能格の活格化、および能格的人称接辞の活格的人称接辞への変化が1人称代名詞から始まったことを裏付けるものである。同じ裏付けは、たとえば北アメリカの北西海岸で話されるハイダ語からも得られる。Swanton(1911:256)に準拠して、ハイダ語における人称代名詞のパラダイムを以下に示してみよう。

人称		格	
		活格	不活格
単数	1人称	ɬ	dī
	2人称	da	dAñ
	3人称	lA	lA
	3人称(不定)	nAñ	nAñ
複数	1人称	t!alA'ñ	iL!
	2人称	dalA'ñ	dalA'ñ
	3人称	L!	L!
	3人称(不定)	ga	ga

ハイダ語では、動詞が行為を表せば活格系列の形態が選ばれる。反対に動詞が状態を表せば不活格系列の形態が選ばれる。不活格系列は、他動詞目的語としての形態でもある。ハイダ語は、したがって、活格言語ということになる。しかしハイダ語は、徹底し

た活格言語、あるいは活格の発達が頂点に達している言語ではない。これは、人称代名詞のパラダイムにはっきりと現れている。上の表を見れば分かるように、活格と不活格の形態的対立は単数の 1・2 人称と複数の 1 人称においてしか見られない。ほかでは、活格と不活格の形態は完全に同じである。このようにハイダ語の人称代名詞は、活格の発達が 1 人称から始まったとする主張を支える一つの傍証として役立つ。

1 人称代名詞を主語とする自動詞文に能格が使われだしたのを皮切りに能格言語の崩壊が始まったということ、つまり活格の始まりが 1 人称代名詞にあったことの裏付けは、カフカースのナフ・ダケスタン諸語からも得られそうである。すでに言及したように、クリモフ (1983 : 119 - 120) はナフ・ダケスタン諸語について、「明らかに能格構造が支配的であるにもかかわらず、主格化傾向を見せる」と述べているが、クリモフのいう「主格化傾向」は筆者にいわせれば「活格化傾向」である可能性が大きい。このようにいう根拠は、たとえばナフ諸語のバツビー語で「行為の能動性」を強調する場合に自動詞文主語が能格をとるという事実 (クリモフ 1977 : 60) と、ナフ諸語では自動詞文主語が 1・2 人称代名詞のときに能格をとるという事実 (中川 1989 : 1467) とにある。

最後に、能格の活格化現象がほとんど察知できないほど微妙である事例を指摘しておきたい。それはチベット語に見られる現象である。チベット語は典型的な能格言語であるのだが、「行く」という意味の動詞を用いた自動詞文においてのみ主語に能格をあてることがあるという。すなわち、そのような意味を表す自動詞文の主語が 1 人称であり、かつ主語である行為者を特に強調したい場合にそれを能格形で表すという (長野 1986 : 127)。1 人称主語を強調するというのは、筆者が推測するに、主語である「私」の行為の随意性を際立たせることである。考えてみれば、「行く」という行為はもっぱら随意的な行為である。そして、随意性は 1 人称の行為を叙述する場合にもっとも顕著に表出される。チベット語で「私」の「行く」行為が時に能格構文をもって表されるのはそのためであろう。

引用文献

- クリモフ Klimov, G.A. (1977) *Tipologija jazykov aktivnogostroja*. Moskva: izdatel'stvo Nauka [石田修一訳『新しい言語類型学 活格構造言語とは何か』三省堂, 1999]
(1983) *Principy kontensivnoj tipologii*. Moskva: izdatel'stvo Nauka
- 近藤健二 (1998) 「分裂能格の諸相 (1)」『ことばの科学』(名古屋大学言語文化部) 第11号 : 5 - 31 .
(1999) 「分裂能格の諸相 (2)」『ことばの科学』(名古屋大学言語文化部) 第12号 : 327 - 347 .
- スワントン Swanton, John R. (1911) Haida. In Franz Boas (ed.) *Handbook of American Indian languages*.

Part 1. Washington: Government Printing Office.

中川 裕 (1989) 「ナフ諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典』 第2巻 : 1464 - 1468. 三省堂 .

長野泰彦 (1986) 「チベット・ビルマ系諸語における能格現象をめぐって」 『言語研究』 (日本言語学会) 第90号 : 119 - 148 .

八杉佳穂 (1992) 「マヤ語族」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典』 第4巻 : 120 - 129 . 三省堂 .

山口 巖 (1995) 『類型学序説 ロシア・ソヴェト言語研究の貢献 』 京都大学学術出版会 .